



特237 15
17
844

新法大成傳

始



特237
844



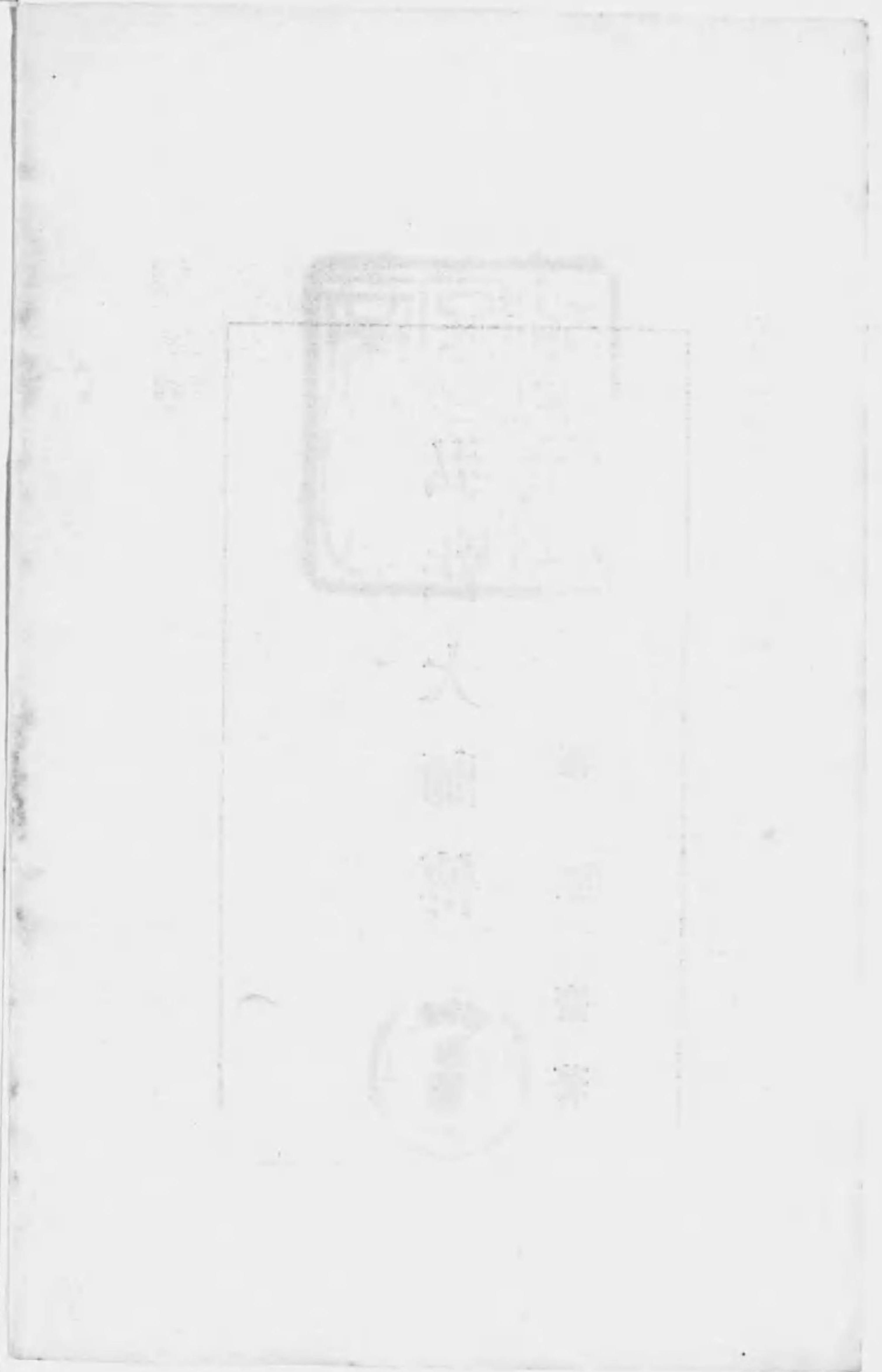
大師傳

釋
瓢
齋
著





像師大法弘



序

弘法大師一千百年の遠忌が行はるゝ時、その高德を追慕すると、もに、大師の非凡なる力によつて、平安朝初期に生み出したる文化を検討し、新興日本の隆昌に資すべく、本社内「弘法大師文化宣揚會」を組織して、多數の碩學、大徳の賛助を得、各種の宣揚事業を行ふにあたり、先づ弘法大師の全貌を知る必要あるを思ひ、こゝ

に極めて通俗的な傳記を編む。これによつて大師が修學のありさま、性行、佛門に入りし理由、求法のさまぐ、立教、社會教化その他について知るを得べく、この偉人によつて、日本の文化がいかにはぐくまれ、いかに進みたるかを推知することができると信ずる。

目次

幼年時代	(一)
大學に學ぶ	(六)
青年時代の修行	(一〇)
得度と受戒	(一三)
當時の佛教界	(一四)
大日經を感得す	(一六)
入唐時代	(一八)
入唐の勅許	(二一)
海上の遭難	(二三)

福州の難關……………	(二五)
長安へ入京す……………	(二九)
惠果和尚の法を嗣ぐ……………	(三三)
惠果和尚遷化……………	(三四)
五筆和尚……………	(三五)
歸朝の途につく……………	(三八)
立教開宗の第一聲……………	(三九)
高雄山に據る……………	(四二)
藥子の亂……………	(四三)
聖恩海のごとし……………	(四七)
兩部神道創設……………	(四九)

南圓堂建立……………	(五一)
即身成佛の實現……………	(五二)
八十八ヶ所の靈場……………	(五四)
東寺を賜ふ……………	(五六)
神泉苑の雨乞ひ……………	(五九)
女人の教化……………	(六三)
滿濃池を修築す……………	(六六)
皇室と大師……………	(六九)
大師の書道と教育……………	(七〇)
高野山と入定……………	(七四)

□□ 幼年時代 □□

平安朝の佛教界に、一大明星と仰がれた弘法大師は、讃岐國、多度郡、屏風ヶ浦にうまれた。時に光仁天皇、寶龜五年六月十五日であつた。

大師の父は、佐伯田公、またの名は善通とよんだ。母は阿刀氏の出で、玉依御前といはれてゐた。そも／＼、この佐伯家といふのは、皇祖神武天皇に仕へ奉り、功あつて讃岐の國造に任せられたのであつたが、大化の改新のをり、諸國の國造を廢せられたので、佐伯氏もまた大師がうまれた折には、讃岐の國の政務を司どつてはゐなかつた。それでも、國造の家柄、血統のたゞしい名家といふので、人々から、かはらぬ尊敬を拂はれてゐた。

この佐伯の一門からは、弘法大師のほかにも、なかなかの人物を、たくさんだしてゐることを考へると、大師の素質の、萬人にすぐれてゐることが、うなづかれる。まづ佛門にあ

る人でいふと、弘法大師をはじめ、法光大師の諡號を賜はつた眞雅僧正は、大師の實弟である。徳行の譽れの高かつた智泉大徳は大師の姉の子である。天台坐主になつた智證大師は、大師の姪の子である。高野山の創建に、大師の身代りをつとめた眞然大徳は、大師の實弟の子である。それから、在俗の人々では、太宰府の長官、佐伯今毛人は大師の父の從兄弟である。正四位大藏卿、佐伯宿禰麻毛も大師の父の從兄弟である。伊豫親王の侍講學士阿刀大足は大師の叔父にあたる。この外、正六位上佐伯酒磨、從七位上佐伯葛野、書博士佐伯豊雄、玄蕃頭從五位佐伯眞橋など、大師の家系から、かうした人材の出でゐることを考へると、なみなみならぬ血脈であつたことが、窺はれるのである。

すべて、かうした偉人のでる折には、いろいろな傳説で、花やかに飾られるもので、大師の出生でもまた、種々な瑞相があらはれ、紫雲が空にたなびき、異香が産屋に薫じたと、語られてゐる。すべてかやうな傳説と實體との關係は、これをたとへると、金米糖のやうなもので、金米糖は芥子粒がないと、砂糖だけでは、できぬものである。芥子粒は金

米糖でないが、砂糖そのままでも金米糖はできない。二ツがピッタリと、とりむすんだ關係から、金米糖はできるのである。だから、いろ／＼不思議な傳説にも、その中にこもる眞實、金米糖の芥子粒のやうなもの、あることを悟らねばならぬ。

大師の幼名に三ツある。一には眞魚、これは、大師が生誕の折からの名と思はれる。大師が五六才になると、両親は貴物とよんだ。それから里人は、神童ともよんだ。貴物の名と、神童の名は、いかに大師が、幼少から、すぐれた方であつたかと、いふことが、推察される。その證據には、大師が生誕の折に、てうと唐土からきてゐた法進上人が、屏風ヶ浦のあたりを化導してゐたが、赤ん坊の泣聲をきくと「あの聲は、尋常一様の赤ん坊の聲ではない。この子は、必ず大法を弘める佛子にちがひない。よく育てあげるやう」と、豫言したほどであつた。

果せるかな、眞魚は普通の子供とは違つてゐた。泥をこねると、かならず、佛像をつくる。石をかさねると五輪の塔にかたどり、合掌禮拜する。はやくから、すでに佛縁に哺ま

れるものがあつた。

眞魚が、漸く七歳になつた折であつた。「われよく、衆生化導の大任をはたすことができ
るや、いなや、世尊の證明を仰ぎ奉らう」と、館の西北に聳える高山によち上り、「もし私
の願ひをいれて下されたなら、お姿を拜ませて下さい」と、一心に祈つた。そして高い巖
の上から、溪底めがけて、とびこんだのであつた。その時、不思議や、天人たちまち天降
つて、大師の身をすつかとだきとめ、元のところへ安置した。はるかかなたの雲の中から
釋迦牟尼世尊が、かくやくと現はれた。大師は、うれし涙に咽び、地に伏して、これを拜
んだとある。それから、その山を捨身ヶ嶽とよび、今に尊い大師の遺跡になつてゐる。

また大師が、八九歳のをり、朝廷から派遣された政状視察官が、屏風ヶ浦のあたりを巡
視したが、俄かに馬からとび下りて大師を拜んだ。随員が、これを怪しんで、そのわけを
問ふと「お前がたには、あの御姿がみえないのか。それ、あそこに遊んでゐる子供は、凡
人ではあるまいぞ。四天王が、天蓋をさへげてゐるではないか」と、いつた。それをき

つたへた里人は、大師をよぶに神童といふやうになつた。政状視察の司人が、大師を拜ん
だ跡を仙遊ヶ原とよび、善通寺伽藍の北、第十一師團の練兵場の中に、保存されてゐる。
この遺跡を、練兵場の中に保存されたのは、乃木將軍であつた。

大師の両親は、ともに、佛教歸依の念にあつた人であつたし、母の玉依姫が懐胎の最初
天竺の聖像が、ふところに入ると、夢みたことがあるし、幼い眞魚が、佛を造つたり、小
さいお堂をたて、禮拜する振舞などから「せひとも此の子は佛弟子にせねばならぬ」と、
両親は覺悟してゐた。佐伯氏や、阿刀氏の一門の人たちも、みな、そのことには賛意を表
したのであつた。

その後、大師の叔父にあたる阿刀大足が、都から讃岐へ、かへつたをりに、両親から、
そのことお話しされると、大足もまた「それが、よからう」と、いつてくれた。そして、
「佛弟子になるには、まづ學問を、せねばならぬ。それには、都の大學へはいるがよい。
が、まだ齡も若いし、それまでは三四年、國にゐて、府中にある國學で、學ぶがよから

う」と、いつてくれた。その親切な叔父の勸告に従つて、大師は十五歳になるまで、讃岐の國にゐたのであつた。

□□□ 大學に學ぶ 二

延暦七年、大師が十五歳の時に、はじめて、長岡の都へ旅だつた。叔父の阿刀大足を力とたよつたのはもちろんで。かへりみれば延暦三年、桓武天皇は奈良の舊都をすて、新都をここに造營されたのであつた。内裏でさへ、まだ十分にでき上らぬのだから、諸官廳も、大學も、官人の邸宅も、假小屋のやうな設備であつた。大師は、こんな荒涼たる新都の空氣には頓着なく、大足の許にあつて、修學に勵んだのであつた。當時の學問といへば讀むこと、書くこと、それから詩文を作ることであつた。もとより大師の明敏な素質と、大足の懇切な指導とで、十七歳まで三ヶ年の間に、學問はメキメキと上達した。師匠の大

足でさへ、その出來のいゝものには、舌を捲いたとは、さもあるべきことと考へられる。

かくて十八歳の春に、いよく大學の入學試験に合格して、官立大學に入學することができた。この時の大學の内容組織は紀傳道、明經道、明法道、算道の四科に分れてゐた。明經は經書を教へる。先生を明經博士とよんだ。大師は明經科にいら、味酒淨成、岡田博士らから經史百家の書を學んだ。もとより錐の囊中を脱する大師の英才は、岡田博士の眼鏡になつた。その將來が樂しまれたのであつた。

が、ここに重大な問題が起つた。といふのは、この時、大師の心境に大變化が起つたことであつた。大師は幼少から佛縁に哺まれ、やがて佛門に入つて、三界の大導師となり、浴く衆生を化導しやうと、我もゆるし、父母からも、許されてはゐたが、岡田博士は、さうでなかつた。「これほどの英才を、ムザムザ僧籍に入れるのは惜しいことだ。官學を出たなら、やがて朝廷へ出仕させて、棟梁の臣たらしめやう」と考へてゐた。しかるに大師は學べば學ぶほど、儒書にとくところの淺薄なのに疑惑がおこつた。「儒學によつて、異國

の古俗を學んだとて、それが當代の何の役にたつか。この身が朽ちたら、その學ぶところは肉體ともにも四大に歸する。その上に、儒學に對して不足なのは、生滅してやまぬ此の人間、そのものゝいだく古今の大疑團を、すこしも説明してくれぬことである。その點からみて、わしは儒書をすてゝ、佛典を繙かねばならぬ」と、かう決心したのは、幼少から播かれた佛種の芽ぐみ、この教界の明星が、輝やきそめる因縁の習熟であつた。

内には、さうした學問上の惱みがあつたことゝ、外からもう一ツ、強い衝動がはたらいたことゝ、この二ツが、遂に大師を佛門に入れた最も近い原因になつた。

外からの衝動とは、大師の父の田君と従兄弟の間柄であつた佐伯今毛人が長逝したことであつた。此の佐伯今毛人は、大師の一門からでゝ、遣唐大使、播磨守、大和之介、民部卿などをつとめ、桓武天皇の皇弟で、皇太子にたゞせられた早良親王の寵眷を被むり、延暦元年、宰相に任せられた。すると造長岡造宮使たる藤原種繼が、藤氏にあらぬ佐伯族の者を、さやうな高官に任すべきでないとの抗議を朝廷に内奏したので、今毛人は正三位

參議の閑職に遷された。やがて種繼は、流矢にあたつて薨する。早良親王は廢太子として、淡路へお流されになる。今毛人は一味徒黨とはみられなかつたが、廢太子の眷顧を被つてゐた關係で、太宰府の長官になつて、はるばると、九州の僻地へくだる。居ること三年、延暦七年、骸骨を乞ふて都へかへり、同九年に七十二才で亡くなつた。

一族の今毛人が、かうした波瀾の多い一生を送つたのも、ひつきやう、前朝からひきついていた氏族間の争ひで、みぐるしい人間界の修羅その物を、マザマザとみせられると、大師は官人として榮達することの、浮べる雲にのつたより、覺束ないことを思はずには、をれなかつた。高く塵外にたち、名聞利慾に狂奔する人間の救済につとめることこそ、人の世に出たわが身の役目でなくてはならぬと氣がついたのであつた。

岡田博士その他、大師の學才に眼をみはつた人々は、どうかして、大師が出家の志をひるがへさうと、つとめたが、大師の決心は、巖のやうに堅かつた。

たうとう大師は、十九歳の晩春、大學の門を去り、非僧非俗の一行者として、佛道修業

のスタートをきつたのであつた。

その時、大師は「聾鼓指歸」——のち改めて「三教指歸」といふ——一書をかきおろして、自分の主張を、のべたのであつた。その書物の内容は、儒、道、佛の三教を比較し、深奥な哲理による人生の解決は、佛敎にまたねばならぬことを、比喩を設けて、巧みにかいた六朝體の大文字で、大師と時代を同じくする白樂天が、これを讀んで激賞してゐる。十八や十九でこれほどの文章が書けたのは、いかに大師が、文筆にすぐれた人であるかを物語る有力な證據になる。

□□ 青年時代の修行 二

遷都から、まだ日があさい。内裏をはじめ、整はぬ都ながら、運櫻は、晩春をかざつて、そいろ春怨を催すをりから、大師は世の無常と、とげがたい大疑團と、何となう落つ

かぬ心のまゝに都門を出た。希ふところは、一日もはやく佛門に歸して、三昧發得をのぞむのにあつた。

大師は、十六歳のをり、今毛人に伴はれて、奈良に勤操大徳をたづね、求聞持の秘法をさづけられたことがあつた。勤操大徳は、三論宗において、當時にならぶものなしといはれた學僧であつた。その人から、さづかつた、求聞持の秘法とは、この法にしたがつて、眞言を誦すること、一百万遍なれば、八萬四千の教法一切に通ずる、とあつたので、まこと佛のいはるゝところに、嘘、偽りがなければ、それを、わが身をもつて、實現しやうといふ道念と、ことに當時は、役の行者によつて拓かれた山岳宗敎のさかんな折ではあり、嶮難をよち、困苦缺乏にたへ、心身の統一を、はからねばならぬ、とかう考へて、非僧非俗のまゝ、大峰山、葛木山、高野山、その他、近畿の靈峯は、のこりなく、よちのぼつた。

そのころの、それらの山々は、道といふものが、なかつた。いろ／＼の猛獸毒蛇が、巢

をくふてゐた。巖には、苔があつく、朽木は、無残にたをれ、それこそ、足のふみいるべき餘地のないところを、すべり、ころがつて、登山せねば、ならなかつた。不惜身命の空海は、その不自由と、危険との中にあつて、行法を修するに、懸命であつた。大龍山にもつた時には、變化魔性の物が、いろ／＼な姿に、顯じて、大師の修行に、祟りをした。室戸の崎の洞窟では、毒龍が、あらはれて、障礙をした。大師は堅固に正念を持して、それらの障礙を折伏したのであつた。

かうした修行の功、むなしからず、しば／＼奇瑞を感じ、佛法の無二を現じ、感應の靈驗を、目のあたり、みたのであつた。

この時の修行は、ひとり四國に止まらず、遠く伊豆國、桂谷（今の修善寺）のあたりまで、足跡をのこし、魔縁の多い古寺の、一切の魔事を、のぞいたことが、御遺告の中に、かきのこしてある。

□□ 得度と受戒 □□

かうして難行苦行の果て、やう／＼二十歳の晩春に、大師は、かねての宿願によつて出家得度の、素願を遂げた。その頃の規則は、個人が私に出家することを許さない。すべて出家するには、次ぎのやうな、條件をそなへたものでなければ、許されなかつた。

まづ第一に、道念が堅固でなくてはならぬ。第二には淨行を三年以上、つんだものでなくてはならぬ。第三には法華經、最勝王經を、暗誦せなければならぬ。第四には禮佛供養の作法に、習熟せねばならぬ。第五には教儀について、十ヶ條の試験問題に合格せねばならぬ。その上に、大學寮の音博士が出張して、漢音の試験をする。その喧しい得度試験を、大師はやすやすと通過して、それがすむと、和泉國、槇尾山寺で剃髮の式をあげ、沙彌の十戒、七十二の威儀をさづけられ、名を「教海」と稱し、あらためて「如空」と名の

り、のち「空海」とかへた。その空海の名こそ、萬代にわたつて、教界にとゞろきわたつた巨星の名であつたのだ。

ついで延暦十四年、大師は二十二才で、具足戒をうけられた。場所は南都東大寺の戒壇。師主は勤操、戒師は傳燈大法師位泰信であつた。この具足戒を、うけることによつて、はじめ一人前の、僧侶になるのが、その頃の嚴戒であつた。そこで、はじめて大師は、大安寺の學僧として、勤操大徳の門下にあつて、佛典の研究に、心を潜めたのであつた。

□□□ 當時の佛教界 二

その當時の佛教といへば、一國の文化を代表するものであつた。今でいふ教育、内政、藝術、ある時は外交、國防のことさへ僧侶の力に、またぬものはなかつた、といふて、いほどの勢ひがあつた。諸國の國分二寺は、みな地方教化のためにつくられたものでよつ

て中央集權の實が、あがつたのであつた。聖武天皇は、東大寺盧遮那佛を造立したまひ、御みづから、寶前において誓願あらせられ、まさに佛道興隆は、冲天の勢あり、といはねばならなかつた。

奈良の諸大寺には、外國から輸入された文化を、専念に研究する學僧が多かつたのは、もちろんであるが、それと同時に、民間にもまた、宗教思想がこゆくなつた。が、そこに上下の隔りができたのは、やむをえない。學問僧は、官權の保護をたのんで、横暴にながれるのはては、道鏡のやうなのがでたり、さうでなくとも、たゞ觀念的な論議にふけて國民の實際生活の上には、なんの功德も及ばさない、といつた多くの遊び人ができる。他方に、憫れな人民たちは、いろ／＼な迷信にとらはれ、よからぬ僧侶や、お寺のために苦しめられながら、その日の糧にも、困るといふ有様であつた。

さやうな、雰囲気からのがれて、大政を、一新する思召から、桓武天皇は、長岡遷都の大事業に着手あそばされたのであつた。古いものは亡びる。新しいものは、まだ何物も

芽ばえぬ、といつた時代にあらはれたのが、大師であつたのだ。

悪がたまりにかたまつた舊佛教に反抗して、佛と衆生とが、直接に握手することのできる即身成佛、眞言密教をかゝけて、一切衆生に、よびかけたところに、大師のえらさを發見せねばならぬ。

□□□ 大日經を感得す 二

大師は、大安寺の學徒として、専ら佛典の研究に心をひそめ、中にも勤操大徳は、三論宗において當代、ならぶものなき學匠であつたから、大師が、三論宗の秘奥をきはめたことは一言をまたぬ。また當時の佛敎界で、最も勢力のあつた法相宗はもとより、俱舍、成實、律などの敎義にわたつて、佛敎の第一義を求めた。けれども大師は、それらの經典を、よめばよむほど、疑ひは、ふかくなるばかりであつた。

そこで大師は、盧遮那佛の寶前にぬかづいて、「われ佛法に従つて、常に要を求むるに、三乘五乘十二部經、心神、疑ひありていまだもつて決をなさず、唯だ願はくは、三世十方の諸佛、我れに不二を示したまへ」と、祈願すること三七日、一夜、夢に靈告をうけた。それは、大和の國、高市郡、來目の道場の東塔下に、大日經が密藏されてある。右は天竺、善無畏三藏が、日本へもたらしたものである。すみやかにひもとき、不二の法門、至極の妙典をよろこべとあつた。大師は、この靈告をよろこんで、來目寺の東塔下に、大日經をさぐると、果してあつた。しかし、その大日經には梵字の眞言、印契、三摩耶形など、秘中の秘事がたくさんかいてあるので、よむことができない。勤操大徳も、これだけは、解釋する智慧がなかつた。

そも、この大日經は、神龜年間に、天竺の善無畏三藏が、大唐國から日本へきたり、密教を弘通するつもりであつたが、その因縁がまだ熟しなかつたので

「小國片城、大機いまだ熟せず。よつて此の法を此の土にとめて、まさに機をまち、時

をまたんとす。來葉、かならず利生の菩薩きたつて、此の教を世にひろむべし」といひ、たづさへてきた大日經を、來目寺の塔下に埋めて、震旦にかへつたのであつた。せつかく、感得した至極の妙典、大日經が、どうしても讀めない、とあつては、猫に小判のたとへ、いはゞ寶の持腐である。そこで、大師は、どうかして、これを讀破する法はなからうかと考へた。が、この上は、唐土におしわたつて、名師をもとめ、大日經の深旨をたづねるの外はない、といふ結論に達したから、こゝに大師は、不惜身命の大悲願を、おこしたのであつた。

□□入唐時代二

大師は、入唐求法の大決心をした。が、それには種々な準備がある。その準備として、日本にあるだけの佛教關係の、諸經論を調査して、これを讀破せねばならぬ。もとより今

日まで、大安寺の學僧として、研究はかさねてきたが、一切の經論となると、これが調査讀破は、たやすい仕事では、なかつたのだ。ことに、その時代には圖書館といつたものが、なかつたから、諸大寺の經藏や、學匠の書物を、借覽せねばならぬ。それが、いづれも秘密にしてゐて、たやすく披見はゆるさない。ある僧は、經藏内へ、はいりこんで、白衣に經文をかきとつて、やうくこれを讀むことができたといふ程の、困難があつた。だから大師の渡唐準備の勉強は、たやすいことではなかつた。

つきには、大日經の讀破が、主たる目的になつてゐる以上、當時日本へ、いさゝか、入つてゐた密教について、知るところが、なくてはならぬ。

その時代の、日本の密教といへば、一尊一法に止まり、ホン部分的なものであつた。たとへば役小角は孔雀明王の咒法を、法道仙人は金剛摩尼の一法をつたへたことは、明白である。この外、泰澄は加賀白山を結界して、北越を化導し、秘密の法器たる三鈷杵をとり、口に忿怒の明を誦したとあるから、これも宗教の一部分を、知つてゐたに相違はない。し

かし、まだ、めだつた勢力ではなく、もとより、一宗を標榜するまでには、いたつて、ゐなかつたのは、勿論であつた。だから、此の方の調査も實は容易なことではなかつた。つきには、留學費の準備である。幾分の費用は、朝廷からくだされるにせよ、それが甚だ乏しいものであつたのは想像をゆるされる。だからこれが調達の苦勞は、なみ大でいで、なかつたのは、疑はれない。ともかく、大師は、さうした困難と戦ひながら、入唐の準備をした。

さて、いよく入唐となると、勅許を得なけりやならぬ。その許可の條件としては、當人の學殖、素養、道念、操行、身分、年齢、學修科目について、僧綱所が調査し、多くの志願者の中から、これを選びだすことに、なつてゐたから、むろん平凡な人間では、その志願者の中に、はいれないから、容易ではなかつた。大師が入唐を發念したのは、二十二才の折で、いよく入唐の勅許をえたのは、三十一才の時であつた。その間、十ヶ年ちかい歲月を、入唐準備に、血のでるやうな苦心をしたことは、いふに及ばず殊に必要な、語

學の練習に、どれだけ骨をけづつたことであらうか、その血のにちむやうな苦勞の結果はいよく入唐してから、ありくと現はれてゐる。それは、最初二十年の豫定で、入唐したのに、二年たらずで歸朝したのは、十二分に調査研究が、ゆきといいてゐたため、一を聞けば十まで悟れる。一見すれば眼光、骨髓に徹する、といったぐあひであつたからと思ふの外ない。それに相違はなかつたのである。

□□□ 入唐の勅許

延暦廿三年、初春、いよく大師は遣唐使にしたがつて、入唐留學の勅許をえた。天を拜し、地に俯し、涙をながして聖恩を感喜した。五月十二日、京都を發足し、六月一日、難波の津から、船出をしたのであつた。

そもく遣唐使は、舒明天皇二年に第一回の派遣があり、仁明天皇、承和五年まで、十

四回をつづいてゐるが、目的は大陸の文化を、輸入するにあつて、かねて海上に孤立する日本國の、獨立擁護のために、そなへる心が、あつたのである。何となれば、著しく文化の低い國は、近所に文化のたかい國があつた場合、戦はずして領土を併合されることのあるのは、古今東西の歴史が證明する。だから遣唐使をつかはし、萬難ををかして、彼の文化を將來せしめ、日本國の實質を充實せしめやうといふのが、語らざる遣唐使派遣の、目的であつたのだ。さて、遣唐使派遣と、なれば、まづ遣唐使の司が、臨時に設けられた。大使、副使から、判官、録事が任命され、隨員、知乘、船事、都匠、醫師から占人、陰陽師、譯語、畫師、樂師まで任命される。住吉社をはじめ、奉幣使がたつて、海上無事を祈願せられる。すべて四艘の船を、周防、安藝といつた中國筋の諸國で建造される。これには木靈祭が行はれた上に、山神を齋きまつらねばならぬ。遣唐使裝束司がおかれて、行装をととのへる。すべてのことが整ひ、いざ出發となると、紫宸殿の賜餐があり、かすかすの餞別品をたまはるのである。

海上の遭難二

大師は、大使藤原葛野麿が、のつた第一船にのりこんだ。かくて難波の津をでて瀬戸内海を通り、七月六日に肥前、田の浦から、帆をあげた。翌七日、戌刻から、黒雲、空をおほひ、大空が、やぶれたやうに大雨がふりだし、波浪たかくあれくるつて、人々は生きたる心地もなく、神明佛陀の加護を祈るの外は、なかつた。

遣唐使として、四艘の船にのりこむのは、大てい、四五百人といふ數であつたが、「生きてかへる者、三人」と、いはれるほど危険な航海であつた。その理由は、まづ造船術の幼稚であつたことをあげなければならぬ。當時の、日本の船といへば、新羅から船大工を貢ぐやうになつて、漸く朝鮮式の船をつくつた位で、齊明天皇の朝に、軍用船をつくつたが、クルクルまはるばかりで、物の用にたゝなかつた。かやうな船で、天智天皇の御代

に、大唐國の海軍と戦つたのだから、わが兵、いかに勇敢でも、勝利をえることは、困難であつた。だから、日本の遣唐使は、新羅船に使乗することさへ、あつたのである。その後、遣唐使のために、造船使を特命されることにはなつたが、やはり造船術は幼稚であつたに相違なく、大師の乗つた船も、今からかんがへると、せいせい、長さが七間くらゐの小船であつたと推定される。

船が、かやうに小さいのに、そのころの航海には、磁石がなかつた。たゞ、日月星辰によつて、方向をさだめるだけだから、風のまにまに、漂はされる外はなかつた。

もう一ツ、いけないのは、季節風の知識がなかつた、舊曆三四月の頃から、七八月にかけて、西南の風がふき、八九月から翌年の二三月へかけては、東北の風がふく。それを知らないのだから、日本から、遣唐使の船がでるのは、いつも夏であつた。唐國からかへるのは、いつも秋冬をえらんだ。だから、ゆくも、かへるも、逆風に帆をあげる順序になつた。船は不完全である。磁石はない。その上、逆の風にのるんだから、難航になるのは、

むしろ當然で、その結果が、「生きてかへるもの、三人」といつたことに、なつたのである。

第二船は、たうく難破して、しまつた。第三船、第四船も、浪のまに／＼、行方知れずになつた。今はどうすることもできない。たゞ運命を佛神の配慮にまかせて、船を風浪にゆだねてゐるの外はなかつた。かうした難航をつゞけること、三十四日間、八月十日に、漸く、大唐國、福州、長溪縣、赤岸鎮といふところへ、漂ひついたのであつた。

その間の苦勞は、筆紙につくせぬものが、あつたのにちがひない。いかに求法のためとはいへ、大師の苦心が察せられるでないか。

福州の難關

船はやうやく、大唐國の、一隅には着いたが、場所は、いまの福建省、霞浦縣の一端である。中央をさること、あまりに遠い。地方官衙のある福州へ、廻航したのは十月三日、

丁度、福州の觀察使が更替したをりで、までと暮せど、上陸許可、長安へ入京の指令はない。官廳事務の都合があつたか知らぬが、一つには、大使の船を、日本からきた貿易船とみた。遣唐大使など、えらさうに吹聴してはゐるが、あれは入港の貢ぎをのがれ、うまい商買をするために、きた船である、と、みとめられたらしく、一行は海濱の、卑濕の地へ逐はれ、觀察官廳から役人がきて、船には嚴重な封印をなし、出帆ができたやうにしてしまつた。こんなぐあひで、かれこれ、三ヶ月もたつが、一向に入京許可の音沙汰がない。これでは、せつかく波浪を、をかしてきた遣唐使のお役目を、はたすことができない。そこで觀察使にかけあふと、まこと遣唐使にたがひがないなら、日本の天子からたまはつた國書を見せるやうにといふ。が、かやうな片田舎の小役人に、國書などさしたすべきすぢでない。が、それをださねば、入京ができない、とあつては、大使たる葛野麿は、ハタと、當惑せざるをえなんだ。そこでその申開きの一札を、大師にかいてもらうやう大使から頼んだ。

當時、學問といへば、僧侶の專賣であつたから、かうした場合に、葛野麿大使が大師に執筆をたのんだのは、何でもないうやうなもの、その他に、文筆の士がゐなかつたわけではない。現に、橘逸勢のやうな留學生も、大師とも一船にのつてゐた。それなのに、わざと大師に、たのんだところに、大師の偉さを偲ばねばならぬ。

大師は、丁寧なそれを断はつた。が、せひとも、執筆ありたいと、たのまれるので、やむなく筆をとり、すら／＼と千古の名文を、かき下した。その文章は

「そも／＼、竹符や、印契といふものは、嘘偽りを、ふせぐためには、必要であらう。日本人の人間は、はかりながら、嘘がきらひだ。日本國が、大唐國と交際するのにかつて嘘偽りを、吐いたことが、あるか。嘘をつかぬからこそ、いつも國産を呈上するのにかつて書を用ひたことはない。且また、遣唐大使に任命せられるのは、日本の天子さまの股肱の臣であつて、嘘偽りをいふやうな人間は、断じて御任命にはならないのだ」

と、いつた事柄が、堂々たる文字でつらねられたものであつた。それを讀んだ觀察使

が、はじめて疑ひを晴らしたのだから、その文章が、いかに唐國の役人の、腸をえぐるもので、あつたかゝ知れやう。觀察使は、これは大變と、直ちに長安の都へ、奏上の手續をとり、御馳走をはこんだり、今さらと、お世辭をならべたり、にはかに十三戸の家をつくつて、遣唐使の一行を、そこへ案内した。大使以下、それで漸く手脚をのばして、やすむことが、できたのであつた。空海の文筆と、霸氣とが、一行の難關を見事にやぶつたのである。

觀察使が、長安に奏聞すると、やうやく、勅詔があつて、一行を國賓として、とりあつかひ、疎略があつては、ならぬと、中央政府からの嚴命がくだつた。大師の一筆が、素晴らしい働きをしたのであつた。

□□ 長安へ入京す

福州から長安へ、千里の道を遠しとせず、馬に、車に、舟に、相當の難路をたどつて、一ヶ月以上の道中をつゞけ、いよゝ長安の郊外の長樂坡につき、それから路次の盛儀はみる者、堵をなし、威儀、堂々として長安の都に、はいつたのであつた。

大使の一行が、長安の宣陽坊へついたとき、意外にも、途中難破したはずの菅原清公ら二十七名が先着してゐて、たがひに夢かと、手をとらあひ、その無事を祝しあひ、かつ、多くの僚友が、海中に命をおとしたことを、傷んだのであつた。清公らは、波にたゞよふこと五十四日で、九月一日に漸く、明州に到着したのであつた。

葛野麿大使は十月二十四日、日本よりの國書と、かすかすの國産品を徳宗皇帝に奉り、皇帝からは、優渥な勅詔をうけ、ついで拜謁をたまはり、日本の天皇の教旨を言上し、宴を

たまひ、位階をさづけられ、首尾まつたくおはつて、長安に滞在してゐると、徳宗皇帝は登遐せられ、順宗皇帝が即位し、葛野麿大使も、その式に列した。かうしたわけで漸く翌年の二月十日に、長安を出發して、歸朝の途にいたのであつた。

大師は、大唐國から留學の官許があつたので、西明寺に留まつた。ひさしい間を、夢にもわすれなかつた長安の都におちついて、ここにはじめて、積年の素志を、のべることのできた大師のよろこびは、想像にあまるものがある。

長安の都は、東西三里、南北二里半の長方形の城壁にかこまれ、諸國の人間が、あつまつてゐた。ひさしい唐代の文化の餘澤で、その時の長安は、殆んど世界文化の中心と、いふてよかつた。従つて西域からはいつた景教、アラビヤからの拜火教、その他の妖教、道教の各寺院が、薈をならべて、おの／＼法幢をかゝげてゐた。大師は、それらの寺々の名僧知識と、いはれるあたりの人々を、のこりなく、研究的な態度で、歴訪した。入唐準備のために、語學の素養を、十二分にしておいたことは、大師をして、非常な便宜を獨占

させた。その上、頭腦が明晰だから、短い期間で、ビシビシと要領をえたことであつた。佛敎の方では、天台もあつた。華嚴もあつた。法相、三論、成實、禪、律もあつた。がその中にも、密敎信仰のさかんなのが、大師は最もうれしいことであつた。

金剛智三藏、善無畏三藏、不空三藏などが、朝野の間にうゑつけた密敎信仰は、非常な勢であつた。中にも不空三藏は、大唐天子の歸依をうけて、灌頂國師として、雨をいのり、雨をとめ、賊難を豫言し、玄宗皇帝から代宗皇帝まで、三代につかへて、禁裡へ出入りが自由であつた。その不空三藏の衣鉢をつたへたのが、青龍寺の惠果和尚であつた。最もさかんなのが密敎で、その密敎の衣鉢をつたへたのが惠果和尚であると知つた空海は、人を介して遂にその門に入つたのであつた。

□□□ 惠果和尚の法を嗣ぐ 二

たとへ紹介者があつたにせよ、その時に惠果和尚は、大唐天子の灌頂國師で、三代にかへて聲望一世にたかき人であるだけに、一介の留學僧にすぎなかつた大師とは、あまりに遠い、隔りがあるはずである。その高德が空海を一眼みるなり、そのまねな法材であることを見ぬいたのは、猩々は猩々を知るもの。さすがに惠果和尚のえらいところで、かつまた空海の尋常ならぬところと、認めなければならぬ。惠果和尚は、初對面から、てうど百年の知己のやうに

「日本からこられた留學僧、空海よ、わしはお前のくるのを、今日か、明日かと、まつてゐたのだ。わしの壽命も、大して長いことは、あるまいと思ふが、法をつたへるものがないので、實はそればかりが、氣がよりであつた。然るところへ、御僧が來られたのは、わ

しにとつて、こんな嬉しいことはないのだ。さあ香華を用意して、灌頂壇に、はいるがよい」と、思ひもかけぬ、やさしい言葉を、なげかけられたのには、大師の方が、びつくりした。聖者の靈感こそ、まことに、おどろくの外はないものがあつた。

大師は、それから毎日、青龍寺へ通ひつめて、眞言秘密の教へをうけ、六月十三日には胎藏の灌頂をうけ、七月には金剛界の灌頂をうけ、金剛頂部に關する經軌、一切の大事を傳習し、八月十日は、阿闍梨位の傳法灌頂をうけ、大日經、金剛頂經の秘密の奥秘をかたむけ、あらたに金剛遍照の名を、あたへられたのであつた。

「五智の灌頂に沐して、胎藏、金剛兩部の秘密法をまなび、及び毘盧遮那佛金剛頂經など二百餘卷を讀む」と、御遺告にある通り、灌頂をうける間に、兩部の秘法や、諸尊の儀軌をまなび、大日經、金剛頂等、二百餘卷を讀破し、その他、あらたに譯せられた經論について、原文の梵字と漢字とを對照して、大いに研究につとめたのであつた。そこで問題の大日經にあらはれた疑ひ、日本の學僧の、たれもが、ときえなかつた難題は、ここ

で、あきららかに諒得しえたことであつた。かうして密教の秘奥は、一器の水の、一器にうつすがごとく、大唐國の聖僧から、日本の大師につたはつたのであつた。

□□□ 惠果和尚遷化 二

ここに不幸なことがおこつた。運命はつねに、大師に、微笑ばかりはめぐまなかつた。惠果和尚は、大師にのこりなく法をつたへた十一月の初めの頃から、四大不調におちりつた。ある日、大師を枕邊にまねいて

「わしも、此の土の縁がつきたやうだ。もはや臨終は旦夕にせまる。お前は、此の兩部の曼荼羅、三藏轉付の品々をもつて、はやく日本へかへるが好い。お前の來るのが、もうすこし遅かつたら、わしの法は斷絶したかも知れない。幸にして、お前に、密教の奥旨を、つたへることができたので、わしも安心して命終することができる。日本へかへつて密教

を弘通し、國恩に報じ、蒼生の福を増進せよ。」と、のこるところなく、遺命すると、端然として、寂をしめした。

天を仰ぎ、地に俯して、大師は師僧の訃をかなしんだ。和尚と大師との、師弟關係は、わづかに、七ヶ月たらずであつた。が、大法の上の師弟關係は、肉身の父子にもまさる親しみがあつた。ことに一千といはれる弟子の中から、えらばれて嗣法をゆるされた大師であつてみれば、その悲嘆は、尋常であるべき道理がない。

翌の正月十六日、和尚の遺骸は葬られた。會葬の法類、四千餘名と註せられた。やがて大師は、かすある諸門弟におされて、惠果和尚の碑文の撰をした。いかに嗣法者にせよ、大師は、日本からきた留學生である。その留學生が、在留國の聖僧の碑文を、えらぶといふことは、なかなかの異例と考へねばならぬ。すなはち、大師が、文章の天才、大唐國人でさへ、およばぬ學才の、所有者であつたと、いふことを、あきらかに證明する史實である。

□□□ 五筆和尚二

大師が、惠果和尚の碑文を撰書したことが、長安の大評判になつた。書家も、學者も、その拓本をみて、目をそばだて、驚嘆せぬものはなかつた。

その評判は、いつしか宮闕にまでとゞろいた。順宗皇帝は、大師をまねいて、宸殿の壁を、かゝせよとの御詔がくだつた。宸殿の壁といふのは、皇帝の御坐所にちかい宮城の中に、晋の王羲之のかいた三間の壁があつた。歲月のひさしき、やぶれ損じたので、これを修理したのだが、なんしろ、書聖王羲之のあとだとあつては、たれあつて、筆をくだすものがなかつた。それを一介の留學僧たる大師にかかせよとの勅命だから、近臣大官みなおどろいた。が、繪言はかへすことができない。これを大師につたへると、大師も、この意外なのと、もし、あやまつては、日本國の名譽におよぼす問題だから、大事をとつて、

拜承いたしかねたが、たつての勅詔だから、遂に意を決して、おうけした。

いよゝゝ、當日になると、大師は參内した。用意、萬端とゞのつた中に、大官、文人が、幾十人となく、大師の技倆いかんとみてゐる中であつて、すつてある墨汁に、にぎりぶとの筆を、おとすとみるや、やがて、それをひきあげ、やゝ先さがりに筆をにぎつて、壁面へ最初の一畫をつける。とみれば、したゞり落ちんとする墨をすくつて、右へ、左へ、腕をかはすとみる間に、はや、スルスルと、一行は、かき下された。ちやうど龍の雲をはき虎の風をよぶやうな、あざやかな筆のはしりに、満座の大官も、文人も、聲をのみ、眼をそばだて、たい、あきれるばかりであつた。

二行目も、三行目も、遂に五行の大書は、草、行、眞、隸、蝌蚪と、あざやかに五體にかきわけられた。満座はたい、息づまるやうな緊張にあつた。やがて縛しめを、とかれたやうに、一同は、はじめて慎ましやかな、讚嘆の聲をあげた。

順宗皇帝は、これをながめられて、さてゝゝ、いみじき筆の痕よ。この當國にも、これ

ほどの書聖は、まれにも、あるまい。きけば御僧は、ちかく日本へ歸國する由、できるなら、永く當國に止めて、ともに、法縁をよろこびたい。が、これで訣れるとは、心残りな
 ことである。こゝに菩提實の念珠がある。これを御僧に進せるから、ながく朕が、記念と
 されたい。一たん、わかれては、また再會のをりはなからう。朕も齡はかたむいてゐる。
 一期の後は、またかさねて來世で、あふであらう」として五筆和尚の尊號を貰つたのは、こ
 の折であつた。

□□□ 歸朝の途につく 二

大師はすでに惠果和尚の法をついだ。密教正統の、堂々たる、允可をえてゐる。この上
 は、一日もはやく歸朝して、密教を日本へ、弘通するのが、國恩に報じ、蒼生にめぐみ、
 佛恩に師恩を重ね、報謝するゆゑである、と覺悟をした。すべて佛道は、學べば、かぎ

りないことゝはいへ、日本で血のにじむやうな入唐の、準備をしたことが、二十ヶ年の豫
 定を、わづか二ヶ年たらずに、短縮させた重大な、原因であつた。

でうと、高階大使が、遣唐使として、來唐してゐたをりであつたから、日本の大同元年
 三月、長安をたつて、八月に明州を出發し、十月、筑紫へ到着した。

空海が、明州を出發する時「密教弘通に相應の地へ、おちよ」と、いつて、日本へむか
 つて投げた三鈷は、その後、紀州高野山の山中におちてゐた、といはれる。その三鈷は、
 今日まで、野山の寶庫に、たいせつに、保存されてゐる。

□□□ 立教開宗の第一聲 二

大師は大同元年十月、無事筑紫へ、かへりついて、しばらく太宰府にとゞまり、遣唐大
 使にことづけて、唐國から、もちかへつた經卷や、密教の法具や、いろいろのものを、

畏きあたりへ奉獻し、朝廷からは褒めのお言葉を玉はり、翌年の初秋まで觀世音寺にと
いまつてゐた。その間、入唐のをりに、海上無事、大願成就の祈りを、さへげた諸社や、
諸寺へ奉養して歸朝の感謝を、さへげたのであつた。

大同二年の秋になると、まことにまつたる勅諭、すみやかに入京せよとの、かしこき仰せ
を被むつたので、想ひ出のふかい瀬戸内海をとほつて、入京の上、新帝平城天皇に拜謁を
仰せつけられ、その時、聖上より、眞言密教を天下に弘通せよとの勅許をたまはり、十ヶ
年のひさしい間、心血をそへいで求めた不二の法門、眞言密教を、いよく旗鼓堂々と、
天下に宣揚することになつた。

その年の十一月八日、大師は歸朝以來の第一聲、すなはち眞言密教が、日本へわたつて
の産聲をあげた。場所は、かつて大師が、大日經を感得した大和、高市郡、來目寺の道場
である。それからこの方、ここに十五年の歲月は、ながれた。その間、骨をけづり、血を
はく想ひで、大日經疏をたづねて、はるばると大唐國におもむき、大願を満足して、ここ

に一生の一大事因縁を完うした。その因縁のおこるところ、來目寺へきて、昔もとめた大
日經の疏を講ずる。むかしは一介の沙彌、今は人天四衆の大導師、かはれば、かはる身を
かへりみて、ひとへに佛天の加護に、感謝したことであつた。

新歸朝の大師が、難解な大日經を、はじめて講義するときまつたへて、遠近から、多く
の學僧が、あつまつた。知識階級の人々も、われおくれじと、馳せさんじた。

大師は、壇にのぼり、おごそかに、三密加持の秘旨を説き、即身成佛の深義におよび、
兩部曼荼羅の哲學的眞理を滔々と説明した。それまで密教といへば、他宗にクツついてゐ
て、獨立した宗派ではなかつた。それを獨立の一派、いな眞言密教こそ、諸宗の上にある
もの、佛教哲理のつきるところ、必らず密教におちつかねばならぬ理由を、獅子吼したの
だ。その第一聲が、いかに朝野の人々の、耳をそばだてたかは、日本國の大小の神祇が現
身を現はして、大師の講筵に列せられた、とまで語り傳へられてゐる。

が、これは大師が、立教開宗した眞言宗は、支那から、つたへた、そのまゝでなく、こ

れを日本化して、新しい體系をあたへ、大唐、天竺にも、まだない一宗をつくり、かつ日本國民の、ゆるぎなき崇神思想と調和するやう、兩部神道を發唱し、本地佛と、垂迹神との間に、輕重の差別をおかず、佛ををがむは神をあがめるゆるみである。と、いふたことから、おこつた傳説であると、考へられる。とにかく、この傳説は、從來佛典をひもとく人たちが、とかく大唐、天竺をおもんじ、日本のことを、かろんする、といつた風潮に對して、甚だしく反對の、國粹主義を、となへたことを、證明するものであつた。

□□ 高雄山に據る 二

大師は、大同四年の八月から、弘仁十四年正月十九日、東寺を眞言宗の道場として、勅賜せられるまで、十四ヶ年の間、洛西、高雄山を住房とした。この間において、大師の聲望は、りうりうと上つた。今の高雄山神護寺こそ、眞言宗が、發祥の地であるのだ。

平城天皇は、大同四年四月に、皇太弟に位を讓らせられ、新帝が、嵯峨天皇にわたらせられる。この嵯峨天皇と、弘法大師と、橋逸勢とを、世に三筆と申す。天皇の書道における御習練は、なかなかの御事と拜せられた。されば、大師も、その點からさへ、御親任をかたじけなくした。それが、密教弘通、眞言宗興隆に、どれだけ力づけられたことかわからない。

大同四年十月には、大舍人山背豐繼を、お使にして世説の屏風兩帖を書せよと、名譽の勅命を、仰いでゐる。大師は、さつそく、おうけ申上げて、立派に勅命を、果したのであつた。

□□ 藥子の亂 二

かやうに嵯峨天皇が、大師のために、お力をそへさせられ、東寺を眞言宗の根本道場と

して御下賜になつたのも、高野山七里四方を結界して賜はり、これを大師の入定留身の地として、金剛峯寺を創建しえたのも、その他、直接、間接に、大師のために、お計りくだされた叡慮のほどは、末代までも感謝いたすべきはもちろん、大師の傳を、よむほどのものが、わすれてならぬ海岳の聖恩である。

嵯峨天皇がかやうに大師に、御信任をたまはつたのは、詩作、書道といった御趣味の、上からのみでなく、實は、御即位のはじめに、いろいろの事件がおこり、大師の献策が、いみじき功を奏したためでもあつた。事件といふのは、藥子の亂である。

造長岡宮長官で、流矢にあたつて死んだ藤原種繼の長子仲成は、性質狼狽で素行の甚だおもしろくない男であつたが、大同の聖天子平城天皇が、御在位のみぎり、妹の藥子を後宮へいれ奉つた。藥子はなかなかの容色があつて天皇の御寵愛を、一身にあつめるやうになつたので、それをよい機に、仲成が政務萬端にわたつてわがまゝにふるまひだした。有司百官、みな仲成のわがまゝを憎んだけれども、その權勢におそれて、誰あつて制肘す

ることが、できなかつた。然るところ、平城天皇は、御在位が三年にみちると、皇太弟の嵯峨天皇に位をおゆづりになり、まつたく政務から遠ざからせられた。すると、いままゝで仲成の權勢を、憎んでゐた人たちは、みな仲成にそむいてしまつた。

かうなると、仲成も藥子も、にはかに世の中が、さびしくなるやうな氣がした。もう一度、自分たちの榮華の夢がくりかへしたかつた。そこで、平城上皇にすゝめ奉り、かさねて御位につかせらるゝやう説き奉つた。そして上皇を奉じて、奈良の舊都により、上皇の仰せといつはり、紀州、畿内の兵をつつた。嵯峨天皇は、おどろかせられて、大師をまねかせられたとき、大師は謹んで、わが國においては、重祚の例がおはさぬでないが、それは御世つぎのない折とか、御幼冲の時とか、その他の理由で、さうならせられるのであつて、陛下、至孝至仁、萬民は、その聖德に敬伏し奉つてゐるのに、上皇が御重祚あそばされることがありませうか。これは上皇の聖明をおほひ奉る君側の奸のなすわざで上皇の御本意ではありませんまい。とにかく、海内が、これがために動亂するのは、

まことに歎はしく一日もはやく御鎮定になるやう、先々帝の御代に、蝦夷を征して功をたて、征夷大將軍になつた阪上田村麿をめさせられ、御説をつたへて、反軍が事をあげないさきにお討ちになるやう」と申上げたので、大師の献策はいれられ阪上將軍は奈良を攻めた。

大師は、秘密の法壇を築き、降伏の祈禱をこらし、晝夜をとはず、丹誠をこらし、一心不亂に祈念せられたが、満願の夜に、たちのぼる香煙の中に、奇瑞があらはれた。これ正しく、大願成就のしるしである。おそれながら、敷慮をやすんじあそばされるやうと奏上したが、果せるかな仲成は、田村麿將軍のためにやぶられ、右近衛豐繼のために射殺された。薬子は、萬人の憎しみを恐れて、毒を仰いで死んだ。

おいたはしいのは、平城上皇と、それから、天皇の第三の皇子で、嵯峨天皇の皇太子であらせられた高岳親王であつた。はからずも、悪臣のため御身にふりかゝる災厄に、苦しませられたわけであるが、平城上皇、嵯峨天皇の御間柄は、もとく御兄弟にあら

せられる。大師は、人道と、佛道と、天道の上から、ねんごろに骨折し申上げ、上皇は、大師の説くところを、御聽聞あらせられる間に、禮佛入信の心を、おこさせられ、弘仁十三年、奈良に灌頂院を御造營になり、大師から金剛界の灌頂をうけさせられた。

皇太子高岳親王は、皇太子を廢せられ、これまた大師の所説をきかせられ、御出家になり、大師の門にいつて、眞如親王と、あらため申上げた。親王は天資、御聰明で、志氣宏邁、學は内外に、わたらせられた。兩部の灌頂はもとより、遂に阿闍梨位の灌頂をうけさせられたが、後、御入唐になり、さらに佛種を天竺にさぐるために、羅越國に入り、虎害にあふて、かくれさせられたのは、おいたはしいきはみであつた。

□□ 聖恩海のほとし

かうしたわけがあつて、嵯峨天皇の大師にたれさせられた眷顧は筆紙につくせぬものが

あるが、ことに大師が、四十一歳のをり、天皇は綿わた一百屯ひゃく屯と、御製の詩一首をたまはつた。その御製を拜し奉ると、「お前は出家の身で、雲のかよひ、松柏のしげる山中さんちゆうにゐる。そして、ちかごろ、消息をきかぬが、恙はないのか。都の方では、柳が芽をふき、花がかれこれほころびかけるが、お前のゐる山中は、まだ寒からうと思ふ。ここに軽少ながら綿をおくるから、これをつけて身體を大切にし、朕が心を體して、世上の難をすくへ。」と、仰せられてゐる。聖恩、かたじけなく、大師感涙にむせびながら、拜受したさまが、思ひやられる。かやうな君臣の間であつたから、承和九年に嵯峨上皇が、おかくれになり、遺詔によつて、薄葬し奉ると、俄かに御棺から、金光を發せられて、一道の靈氣が高野の方へ、とんだとさへ語りつたへられた。これは、大師にたまはつた御親交と、上皇が、つとめて薄葬を、御遺詔あそばされたのと、二つの事實が、いりまぢつて、この傳説が、おこつたのであらう、とおしはかり奉るのである。

□□□ 兩部神道創設 二

藥子の亂が平らぐと、間もない弘仁二年に、大師は嵯峨天皇の御詔によつて、神祇官の大中臣智治ちぢに唯一宗源神道の灌頂をうけた。うけてみると、神道の奥旨と、眞言秘密とは、ピツタリと融合するので、これから大師は、兩部神道をとなへて、日本教界における一大運動を、おこしたのである。

佛教が、最初に、聖徳太子によつて弘通せられると、保守派の人たちは、これ夷狄の教へである。皇國の神ながらの風とは、反があはぬと、猛烈な反對をした。また佛教を奉ずるものは、諸天神祇は、戒律をうけないものは、沙彌より、いやしいと罵り、佛神教徒の間が、とかく圓滿を、かいたのであつた。そこで行基菩薩は、本地垂迹の説をとなへて、神佛の調和につとめたが、その説くところが、佛は本地であつて、神は垂迹である、とか

うぶふので、神佛の間に優劣があつて、この説も十分に人々の歓迎をうけなかつた。大師のとなへた兩部神道は、佛神の間は、平等である。と、かういつた建前で、日本の八百萬の諸神は、眞言宗教の兩部の曼荼羅とあらはれる諸佛、諸菩薩と、おなじである。だから佛と神とに優劣はない。神を拜むのは同時に、佛に、回向するのである。と、かういつた風に、幽玄巧妙にといたので、未い間を、あらそつてゐた神佛二教徒の間は、これで圓滿に、解決された、のであつた。

然るところ、明治初年に、排佛歸釋をやつたと同時に、神佛を分離し、ふたゝび今日では、神社禮拜問題、大麻問題、神社宗教論、神社非宗教論が、やかましい問題に、なつたのである。これをおもふと、大師がすでに、千年の昔に、この解決を、かんがへたのは、おどろくべき、先見の明といはねばならない。

□□ 南圓堂建立

すでに、畏きあたりの、この上ない御信任をかたじけなくした大師は、同時にまた時の權門勢家の外護をえた。

藤原氏には四家の別があつた。鎌足の子の淡海公に四人の子があつた。一は武智麿、これを南家といふ。二は房前の大内といつて、これが北家だ、三は式部卿といつたので式家と唱へた。四は左京の大夫であつたのでこれを京家といふた。建てられた南都の南圓堂は長岡右大臣内麿が、當時藤原氏の權勢が次第に衰へ、仕官者がわづかに三四人にすぎなかつたので、大師に「家運の繁昌を祈る秘法」を願つた結果大師は「不空罽索觀世音をまつるやうに」と、教へた。さうして大師は自らのみをと、見事な尊像五體をつくつて、これを南圓堂の佛殿にをさめた。内麿は佛殿の建立を見ないで亡くなつたが、遺子冬嗣が志

をついで、大師の指導にしたがひ、着々工をいそぎ、弘仁四年正月に竣工したのである。その功德はあらたかであつた。落慶供養の翌年には、冬嗣の館へ天皇の行幸あり、冬嗣には一萬五千戸の封戸をたまはり、冬嗣は進んで太政大臣になつた。その後、この北家の一門はいよいよ榮え、それも南圓堂建立供養の結果と仰がれ、大師の法力のいかに高く、強く、尊いもので、あるかい、想ひやられたのである。

□□□ 即身成佛の實現 二

大師が歸朝せられて、眞言密教をひらくまでは、南都、北嶺の七宗では、三劫成佛といふて、人間は無限の時間に、無限の修行をつんで、無量廣大な功德をつまねば、佛にはなれない。といふのであつたが、そこへ大師が三宗の法を修すれば、この身、このまゝ、一念一時、一生に佛になれる、といふのだから、七宗側にとつては、正面の反對論である。

そこで、七宗の學僧たちは「空海にいつかは、眼に物みせねば、ならぬ」と腹をかたくしてゐたのであつた。

弘仁四年の正月、宮中の御齋會がすんだをりに、嵯峨天皇が清涼殿へ、大師をはじめ諸宗の學僧、大徳を集めさせられ、各々ほこるところの、宗旨、如來の教旨を、おたづねになつた。各宗の學僧はこゝを先途と、論議をかさね、談論は水のながれるやうに、あざやかであつた。が、みなが、いひ合せたやうに大師の即身成佛に、するどい矛をむけた。大師は一々の論難を、利刃でさくやうに明快に説破した。その時嵯峨天皇は、大師に向はせられ、

「空海の申すところ、道理のあるはよくわかつた。が、まこと即身成佛ができるかできぬか、眼のあたりにそれをみたい」と、仰せられた。

大師はつゝしんで、これを承はり、清涼殿の床の上で、南の方をむいて結伽趺坐し大目の智拳印をむすび口の中に密呪をとなへ、しばらく三摩地の正念に、はいると、ふし

ぎなるかな、妙なるかな、大師の姿は、そのまゝ大日如來にあらはれ、頭には五智の寶冠をあらはし、膝のあたりには、微妙な蓮華がわき、全身からは金色の光りを發して、仰いでみるのに、眼がクルめくやうなので、有司百官は頭を床につけて大師の姿をふし拜んだ。かうなると、南北七宗の學僧も、もはや大師の眞言密教には齒が、たゞなくなつた。眞言宗こそ。諸宗の最上にあるべきだ、といふことが最も雄辯に立證せられたのであつた。

□□□ 八十八ヶ所の靈場 二

大師がのこされた偉大な事蹟、その中の一つに、四國八十八ヶ所の靈場がある。四國は大師をうんだ國土である。その土地にゆかりの多いのは當然ともいへるが、これらの遺跡は、大師が求聞持の秘法を修せられた所もあり、妖魔退散をいのつた所もあり、山をこえ里をめぐり、あまねく衆生を濟度した場所で、大師の遺徳をしたうものが、その記念の土

地へ御堂をつくつた。寺をたてた。それからそれと、たうたう八十八ヶ所の靈場になつたのであるが、阿波の國で二十三ヶ所、五十七里三町。土佐の國に十六ヶ所、九十二里十町。伊豫の國に、二十六ヶ所、九十七里十四町。讃岐の國に、二十三ヶ所、三十六里三町。昔はもとより、今にかはらぬ難所が多い。それを遍歴する間に、罪業のふかい人間も、雜念をはらつて、自然と、即身成佛の妙諦をさとることができるのである。

石手寺縁起にある衛門三郎の話。伊豫の國司河野氏の一族に、衛門三郎といふ強慾非道な男があつて、神佛を信せず、物慾かぎりなく、大師が石手寺建立のため、諸人の門にたつて布施をこふと、三郎は箒で大師を擲つた。大師は手にした鐵鉢でこれをうけとめると鐵鉢はものゝ見事に八つにくだけて、飛んでしまつた。その後、三郎の子が八人あつたのに、ひとりのこらず、次々に亡くなつた。三郎はふかく無常の感にうたれ、それからは大師の教へにきくところあり。大師の残された四國靈場八十八ヶ所を順逆に、二十二度巡拜して、天長八年の冬、焼山寺の麓に死亡した。その後、國司河野利公の一子が生れたの

に、生れながら一寸八分の小石を握つてゐた。それをみると、「衛門三郎再生」とかいてあつた。三郎が臨終の一念がその信仰力によつて、この奇瑞をあらはし、河野一門がそれから繁昌したといはれる。こんな傳説ははきすてるほどあるが、それらの中から、無限の教訓を搾取することが、できるのが、ありがたいのである。

□□東寺を賜ふ□□

弘仁十四年正月十九日、藤原良房卿が多くの從者をしたがへて、高雄山の雪をけたてて、神護寺へ到着した。良房卿はさきに南圓堂をたてた冬嗣公の次男であつたから、大師の高徳には、この上なく隨喜してゐる人であつた。

その良房卿が、いま嵯峨天皇の勅使として、大師の下へ、ありがたい聖旨をつたへに來たのであつた。

聖旨とは平安の新都に、朱雀大路をへだて、東西にそりたつ大官寺の、東寺、西寺の、その一ツである東寺の方を、大師に賜はるといふ、この上もない、光榮ならびない、洪恩の沙汰であつた。

大師は八ヶ年を、高雄山を根據として、眞言密教の弘通につとめたが、最澄のよる比叡山などとくらべて問題にならぬ小規模なものであつた。だから眞言密教の根本道場としては、どう考へても不足であつた。そこで大師は、高野山の地を相して、そこに根本道場の中心をうつさうと、ひそかに考へずにはをれなかつた。嵯峨天皇はこれを、まことに氣の毒なことであると思召され、平安京のかなめの地の、しかも漸く、建ち上つてからいくらかもたぬ大官寺を、そのまゝあげて大師に賜はつたのだから、大師のよろこびは非常なものであつた。

大師は、唐土から傳來した阿闍梨付囑の寶物、三國傳來の、秘密の法具法器など、佛菩薩の像、歷代祖師の御影、一切の經卷をあげて東寺の經藏に納め、その恩賜の東寺に、

二ツの掟をきだめた。

一は、鎮護國家の祈禱道場とすること。

二は、他宗門徒の雜入を禁ずること。

そも、桓武天皇が、東西の兩大官寺を御創建になつたのは、ひとつに國家鎮護の觀應によるは勿論である。いまそれを賜つた以上大師としては眞言の秘法を修して、國家の安穩をいのり、皇室の繁榮をいのり、寶祚の無窮をいのり奉る、勅願の道場とすべきは當然である。その名を教王護國寺とあらためて、法燈が今なほ絶えないのは、全く大師のたてた方針によるのである。

他宗の雜入を禁じたのは、大師の御遺告にある通り、大師の祈願心のうすくなるのを、嘆いた結果である。

「これ狭心にあらず、眞をまもるのはかりごとなり。師資、あひつたへて、道場となすものなり、豈門徒にあらずるものを、猥りに雜ふべけんや」

と、あるのが、盡して、十二分の理由である。その頃の寺々では、一宗を標榜してゐるにはあるが、諸宗兼學、雜學であつたから、信念が稀薄になるはまぬかれがたい弊所であつた。秘密の法義を嚴守し、純眞の信仰を、宣揚するためには、せひともかうした手段に出なければ、ならなかつたのだ。

□□ 神泉苑の雨乞ひ

天長元年の正月になつてから、一滴の雨もふらなかつた。冬とはいへ大地はポロボロになつて、鐵をうちこむと、灰のやうな土が、煙のやうにあがるばかりであつた。蔬菜は赤くなり、山の樹でさへ枯れるのがあつた。都も、鄙も、困るのは河水がなくなつたことだ。船がうかべられぬので、品物の運搬ができなくなつた。牛馬の脊ではこばれる品物は、いひ合せたやうに、値がのぼつた。それから井戸水がみな涸れた。それでは、飯をか

しぐことができなかつた。

そのをり、ちようと唐僧が平安京へきてゐたので、

「こんな、ひでりがつづくのは、異國の僧がきてゐて、秘密の咒法をやるからだらう」
いつの世にも、そんな流説がおこるもので、あまり世間の非難がたかいので、朝廷でも
たう／＼、唐僧をおひかへされることになつたが早魃はやはりつゝいた。遂に皇室の御園
である神泉苑で請雨經の法を修すべきやう、勅命が大師にくだつた。そこで、大師は神泉
苑で雨乞ひの秘法を行はふとしたが、ここに端なくも、一ツの争ひがおこつた。

といふのは東寺に對する西寺、双方ならんで、大官大寺である。東寺の空海が雨乞ひを
するなら、空海より、齡も上だし、法蔭もふけてゐるわしの方が、まづもつて、勅命を奉
すべきだ。といつて、西寺の守敏僧都が申し立てた。

「守敏は、僧綱に補せられてをります。これまでもたび／＼祈雨の祈禱をつとめたことが
あります。空海は僧綱に補せられてゐない。たゞの凡僧でありませんか。祈雨の勅命が空

海にくだるなら、まづもつて、この守敏に勅命が、くだるべきではありませんか」

いやしくも、大官寺に所住の、守敏からかう申しでる以上、朝廷の方でもこれを排斥
するわけにゆかぬ。それではと、いふので、まづ守敏に請雨經を修せしめることになつ
た。

この守敏僧都は、陀羅尼經を誦して咒験のある人で、粟を水に入れて、咒をとなへると
その水が、湯氣をたて、煮えあがる。その粟を、病者にたべさせると、いかな病者もた
ちあがるので、天下の大修験者と仰がれてゐた。

ある時嵯峨天皇が、弘法大師をめさせられ、その坐へ守敏をまねかせられて、
「守敏、いつもの通り、加持してみよ」

と、勅命になつた。守敏はうや／＼しく、粟を鐵鉢にいれ、水をそゝいで、咒文をとなへ
るが、いつかうに水はあつくならぬ。こんなはずではなかつたと、あせればあせるほど、
靈験があらはれぬ。ついに額から汗をながして、退前しなければ、ならなかつた。

それは、大師が、眞言の大法をもつて、結界の印咒を修せしため、靈験がなかつた、と知るや、それから守敏はひとく大師を怨むやうになつた。

その怨みが、神泉苑の雨乞ひにつきまとつたのだ。

勅許をえたのだから、守敏はよろこび勇んで、神泉苑に壇をかまへ、祈念すること一七日、神泉苑の池から飛龍、天にのぼるとみれば、たちまち黒雲が天の一方にわき、大雨は瀧のやうに降りそゞいだ。洛の内外、みんなよみがへつたやうに、守敏の法力をほめたゝへたのであつた。

そのとき有司をつかはし、その雨のふつた範圍をお調べになると、平安京のホンちかくだけで、すこし遠方へゆくと、一滴の雨も降らなかつたことがわかつた。

「守敏の法験、あまねからず」

と、さらにあらためて大師に請雨法を修すべきやう勅命がくだつたのであつた。

大師はまづ神泉苑の四門をとち、池畔に秘密の壇をかざり、善女龍王をまつり、請雨法

を修し、祈禱せられると、たちまち金龍が姿を現し、大雨がふりもふつたり、三日間といふものは、小やみなく降りそゞいだ。野も、山も、草も、木も、人間も、みな一時に、蘇生したのであつた。

かくて、上御一人より、下四衆にいたるまで、眞言秘密の、法益を知るにいたり、三月十七日、天皇は大師に少僧都の僧官をさづけられた。律師の位階をへすに、たちまち少僧都に補せられたのは、古今を通じて一大破格の恩寵であつたのである。

□□ 女人の教化 □□

高野山といへば、女人堂をおもひ、女人堂といへば、女人禁制をおもふ。ついでに大師は女人の教化をこばみ、いはゆる女子は三界に家なしといつた蔑視観をもつてゐたといふものがある。それが大へんな間違ひであり、ひとしく佛子として、大師が男女を平等に取

扱つた、活材料がある。

かたじけなくも、嵯峨天皇の皇后は、もと橘嘉智子さまと申上げ、なか／＼の佛教篤信なお方であつた。

もろこしの山の彼方にたつ雲は

ここに焚く火の煙なりけり

かういふ御歌をおのこしになつてゐる。ふかく、禪理に通じなければその意味を、味はうことができない。洛西に檀林寺を御創建になつたので、檀林皇后と申し奉る。

われ死なば、焼くな埋めな野にすてて、

やせたる犬の腹をこやせよ

と、御遺命になつたと承はる。ふかく世の無常に徹せられた御心境と拜せらるゝ。この皇后はあつく大師に歸依せられ、眞言の灌頂をおうけになつた。

つぎに大師の母、玉依公を、大師は高野山を開いてから、孝養のためとて、山麓の慈尊

院におき、山を上下するたび、かならず慰問をおこたらなかつたが、玉依公は、その教化により、彌勒菩薩の本誓を信じ、彌勒菩薩の三昧に入り、安らかな往生をとげたのである。つぎに淳和天皇の皇妃眞井御前は、天長五年二月靈夢にかんじて、二人の女官をともし、夜宮中を出で攝津にむかひ廣田神社にもうで、その翌日摩尼峠へのぼつた。その時にはかに紫雲くんだり、雲中に一美女あらはれて、此の山は四神相應の地、われ山中に珍寶をうづむ、汝來つて道場をいとなむべしと託宣した。妃は大いによるこんで、ここに寺院をたて、三人の女性が如意輪觀世音の陀羅尼をとなへ、晝夜をわかつた。十一月、大師をまねいて、如意輪の秘法をうけ、それ以來一心に秘法を修し、三度び大師を請じて、秘密の灌頂をうけた。大師は妃の信心に感激して、有髪のまゝに傳法灌頂をさづけたといふ。有髪の女人で傳法灌頂をうけたのは、支那にも日本にもこの方をのぞいては、絶對になかつた。

承和二年三月二十日、妃は南方にむかつて合掌し、如意輪觀世音の呪をとなへて、やす

らかに、遷化された。年三十三歳。ふしぎにも、大師が高野山で入定した前一日であつた。大師と妃との間に、いかにふかい法縁がむすばれたかをものごたる縁起でないか。これをみても、大師が女人教化に、とれだけ骨折つたか、うかいはれる。

□□□ 滿濃池を修築す 二

人のため、世のため、身をつくして奉仕するは、菩薩大慈のつとめである。だから役の行者、行基菩薩、いづれも嶮難をひらき、橋をかけ、池をきづいた傳説が、日本國中にこつてゐる。大師ももとより、濟世救民のいろく々な仕事に關係したが、滿濃池の改修はその中の最もあらはれたる一つである。

滿濃池は、讚岐國宇多郡と多度郡との境にある。この地方は雨ふらざること、五日なれば、たちまちひでりになり、その反對に三日つゞいて雨がふれば、直ちに洪水になる。と

いつた厄介きはまる地方であつた。そこで文武天皇の御代に、國守道守朝臣が、ここに池堤をつくり、溪々の水をあつめ、萬餘町歩にそゞいだので、萬濃池とよんだ。

しかるに弘仁九年、此の池の堤がくづれて、濁水が田畠ををかし、あたり一面慘澹たる光景に、なつたので、國守はたゞちにこれが改修に着手したが、三ヶ年をへても、工事は一向にはかどらない。その中經費はなくなるし、國にも郡にも徴發すべき壯丁がなくなる、といつた有様になつたので、國司郡司が、途方にくれ、よりく相談のあげく、大師が當國の出身なるをたどり、朝廷へ大師を下向せしめ、工事を進捗せしめるやう、御下命を願つた。

土木工事と大師、あまりに縁遠い話のやうであるが、國司や郡司のねがふところは、大師の徳力にあつた。その時の嘆願書をよむと、

「僧、空海は多度郡の人なり、聲、彌天に冠たり、山中に坐禪せば、鳥、巢くひ、獸、狎る。道俗、風を欽び、民庶影をのぞむ。居るときは、すなはち生徒市をなし、いづる時は

すなはち、追従雲のごとし」とある。大師の徳望のたかき、多くの人間が、したひよるの
 で、それらの人力をかり、信仰の力で、決潰した堤防を、築造しようとして、考へたのである。
 大師は勅命によつて、萬濃池へ來り、池床に眞言秘密の壇をつくり、護摩の秘法を修し
 障礙をのぞき、佛天の加護をいのつた。郷里の人々は、みな大師の下向ときいて、雲霞の
 ごとおしよせたので、そこで大師は秘法を修したのち、今、空海、佛天の冥助を、いの
 つて、萬民のために、此の池を修築せんとはする。みな人、力を空海にあはせて、この事
 業を完成せしめよ。といふと、雲集した諸人はみな大師に力をあはせて、さしもの大工事
 を、たい埒もなく完成させてしまつた。大師はもとより、國司郡司は手を額にして、大師
 の徳を、讃仰したのであつた。大師は滿濃池と字を改めた。
 かうした次第で、大師は諸方の池を築造してゐる。當時の日本は、人口がすくなく、土
 地がひらけず、開拓の必要はあつても人力と經費との不足で、思ふやうに、開墾せられな
 かつた。大師の偉力は、その不足を補つて、多くの人々を救済したのであつた。

□□ 皇室と大師

大師は皇室を尊ぶこと、すなはち國家を安泰ならしめること、と、解釋してゐた。だか
 ら皇室を尊崇すること、いたれりつくせるものがあつた

平城天皇、嵯峨天皇、淳和天皇、仁明天皇、御四代を通じて、國家のため玉體のため、
 秘密の壇をかまへ大法を修すること、實に五十一度であつた。

藥子の亂のやうな、内亂鎮定のためもあつた。神泉苑の雨乞のやうな、五穀豊熟のため
 もあつた。嵯峨天皇の御病氣御平癒のためもあつた。弘仁九年には、大疫流行を閉息せし
 めるためもあつた。その他宮中眞言院の御修法や、觀音供養などもあつた。中にも最もあ
 らはれたのは、後七日の御修法であつた。

この御修法は、正月八日から十四日まで七日間、宮中において眞言秘密の大法を修し

天下泰平と玉體安穩をいのり奉り、最後の日には大阿闍梨、親しく玉體に咫尺し、香水をそそぎ、加持し奉る大切な儀式であつた。

承和二年の御修法は、大師がこれを嚴修した。のちこれが宮中の年中行事として後花園天皇の御時まで、六百五十年の間は、絶ゆることなく奉修せられた。その後故あつて中絶し、後水尾天皇、元和八年にいたり、漸く再興された。

□□□ 大師の書道と教育 二

嵯峨天皇と大師と、橘逸勢とを天下の三筆と仰いだか、大師は唐帝の招きによつて、宮中の壁に王羲之の跡をおぎなつて、五筆和尚の名をえたほどの人だから、書道に關する著書もかすくあつて、日本における書道を説いた最初の書物といはれる。かの平安朝の三蹟といはれた小野道風、藤原佐理、藤原行成は、いづれも大師の流れをくんだ人々で、

お家流といひ、徳川期まで、その流風をのこした書道一派は、これまた大師にみなもとを發してゐる。

もとより、大師は書道にかぎらず、詩文に長じ、筆をとり、紙に向へば、考ふるところなくして、あの華麗詩文、暢達な文章がさらさらとかけたのだから、おどろくべき、偉才と仰がねばならぬ。その他、繪畫、彫刻ゆくとところとして可ならざるなき大天才を、一々ここに紹介するのは、本冊子の、つくし難いところで、昭和九年三月、大阪朝日新聞社主催の「弘法大師文化宣揚會」の展覽をみられた人は、いはゆる百聞は、一見に如かず。大師の偉才に、たいおどろくの外ない實證に參じらるゝであらう。

大師が、日本の教育史に抹消しがたい偉蹟をのこしたのは、綜藝種智院の設立であつた。場所は東寺の東、今の大宮通と油小路との中間の地にあつたやうだ。天長五年十二月十五日に、はじめて開校した。この學校の特長は、教育の階級を打破したこと、入學者は、僧俗にかぎらなかつたこと、教へるところは、神、儒、佛三教ののぞむところを學ばしめた

こと。

大師の時代の、學校といへば、貴族が自家一門の子弟を、教養するためであつた。たとへば、淳和天皇の皇子、恒良親王のたてられた淳和院、橘氏一族のために、たつた學館院、和氣氏のための弘文院、藤氏一門のための勸學院といつたもので、藤氏の繁榮とともに、中にも勸學院は、官立の大學をしのぎ、勸學院の雀は蒙求を囀るとまでいはれたものである。その間にあつて、大師が綜藝種智院をたて、學問を貴族の獨占にまかせず、一般子弟に内典、外典をまなばせたのは、非常な英斷といはねばならない。かつまた、當時の僧侶が佛典をまなび、貴族以外の、學修者といへば、僧侶にかぎられてゐたのを、俗人の子弟に入學をゆるし、のぞみにまかせて佛典を教へた。その點においてもまた、偉大なる革新といはなければなるまい。

それからもう一つ、わすれてならぬのは、『いろは歌』の創作である。漢字の省筆、略體草體の妙所をあはせ、涅槃經の四句の偈文を日本式にあらはしたのが、いろは歌である。

いろはにほへとちりぬるを

諸行無常

わかよたれそつねならむ

是生滅法

うるのおくやまけふこえて

生滅々已

あさきゆめみしゑひもせす

寂滅爲樂

これぞ一代佛敎の眼目で、これを四十七字の和歌につくつた最初のもので日本佛敎に行はれる和讃の根源であるのみならず、この假名文字ができてから、日本の文學は大飛躍をとげ、漢字をかいてその音訓や、意味をかいた萬葉時代の不自由さから、はじめて自由の天地へおどりることができた。そこにはじめて、日本文學の自由な表現がうまれたのである。たとへ大師のいかなる功を否認しやうと、此の點だけは、萬世にわたつて、日本國民が感謝せずにおかれぬ遺徳に仰がねばならぬ。

□□ 高野山と入定 □□

大師は、密教修行の場所として、高雄山神護寺は、規模がせまく、もつと山中幽邃の地をのぞんでゐた。長安で修行のをり、青龍寺が市中の賑やかな場所にあるので、弟子たちの散心をよびやすく、かねて惠果和尚もそれを嘆いてゐたのを知つてゐるので、都に遠い山中の地をたづね、密に高野山をえらび、そこを結界して、密教修行の地とし、かねて入定の場所と定めたかつた。その後嵯峨天皇から、東寺を勅賜されたとはいへ、なほ都門である。當時の都市佛教について、いろいろの弊害を知つてゐる大師は、願はくは高野の山に、密教根本の道場がつくりたかつた。大師がその願ひをおこしたのは、弘仁七年の七月それから承和二年の入定まで、二十ヶ年といふもの、高野山の創建に、心血をそゝいでゐる。

幸にして、高野山に、伽藍建立の勅許をえて、今の御影堂ならびに二十一間僧房を山上にたてたのは、弘仁七年であつた。大師は弘仁八年の秋、諸弟子をひきいて、登山し、金堂、大門、東西の兩塔、その他諸堂をたてる地を相し、軍荼利明王の秘法を修し、七日七夜にわたり、七里結界の祈禱大法會を行つた。悪鬼邪神は、高野境内、七里の外にいて諸天善神は、伽藍をまもり、正法を興隆せしめ玉へと祈つたのであつた。

何分當時の高野山といへば、巨木が斧を知らぬまゝに、晝もくらしい大森林であつた。それを拓くのが容易でない。ことに工事の従業員は、みな遠方からまねかねばならぬ。それに高山だから雪はふかい。物質の運搬は不便をきはめる。工事ははかどらぬ。そのうち經費にはゆきなやむ。いかに大師の法力をもつてしても、その困難は筆紙につくせぬものがあつたのである。もとより大師の背後には、嵯峨上皇をはじめ、皇妃、親王、大臣なぞ力を添られたではあらうが、その援助を乞ふまでに大師がいかほど骨を折つたかは、察するにかたくなないのである。

高野山の建築で最もきこえてゐるのは、さきに述べた女人堂であるが、なるほど大師は高野山へ女人の登山を禁じ、嚴重にこれを戒しめた。その理由の一ツは朝廷から定められた掟を守つたことで、すでに弘仁三年嵯峨天皇は、俗の男女が、聽法に名をかりて、僧房へ出入することが風紀の上に害ありとなし、俗の男が、尼寺へはいり、俗の女が男僧の寺へ出入することを嚴禁せられた。だから、男僧のゐる高野山へ、女人の上ることを禁じたのは、時代の法律を嚴守したのである。

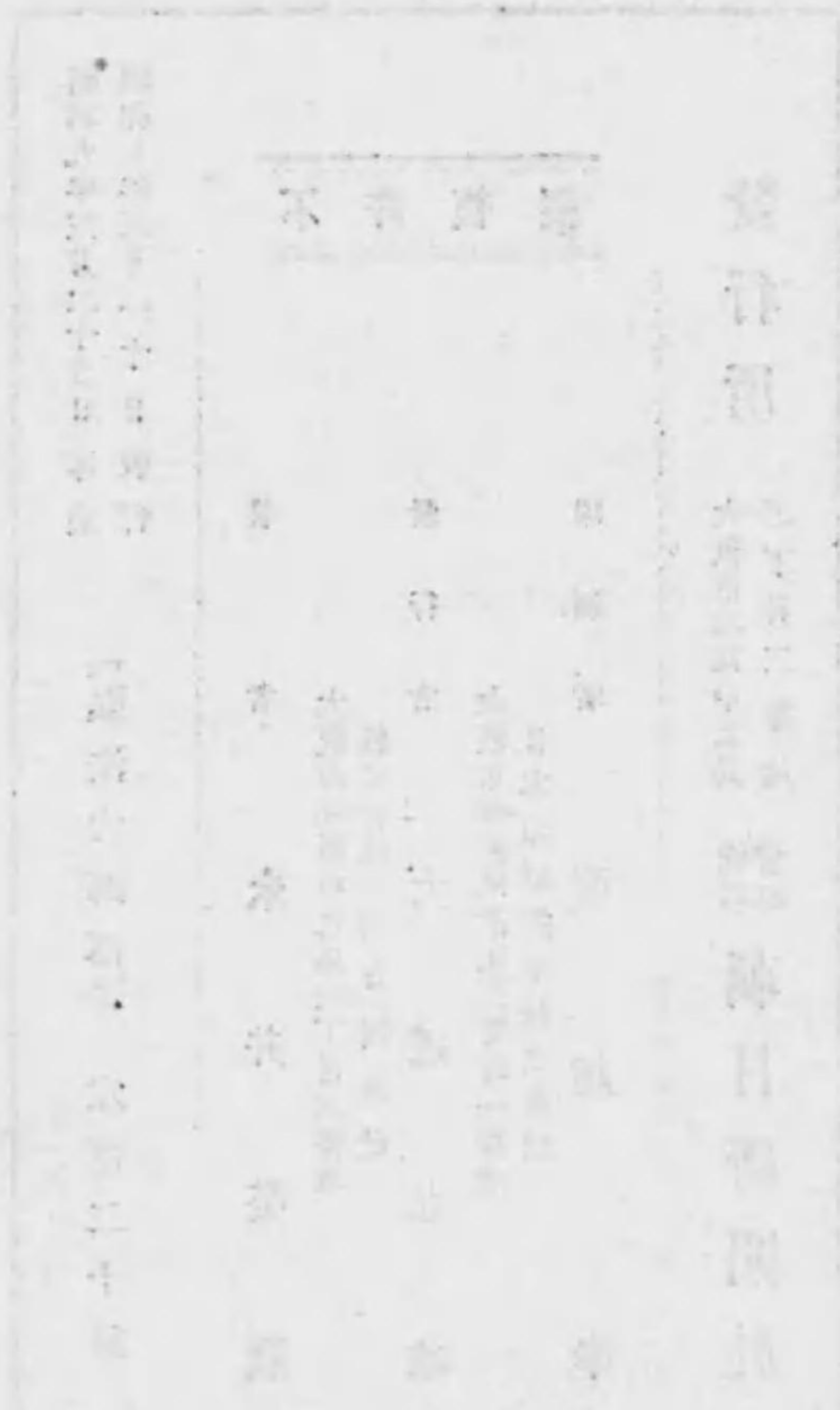
もう一ツは、修道上の障りを招くことをおそれ、大師が自發的に女人を警戒された掟があるため、後世までそれがひさしく守られたのである。それが佛道の眞意義からでた女人排斥でないことは、さきにのぶるが如くである。大師の遺告には、かうかゝれてある。「それ、女人はこれ、萬性の本、氏をひろめ、門をつぐものなり、然れども、佛弟子において、親厚すれば、諸惡の根源、嗔々の本なり、故に女人に親近すべからず、僧房の内に入れをらしむべからず、云々」——知るべし、それが佛道修行上の、用意にいであること

を、——大師は、信修するあれば、男女を論せず、みなこれその人なり。ともいはれ、眞言秘密の教に男女の差別はない。法を諦信し、修行すれば、即身成佛、往生淨土に、うたがひなしとの、意をのべてゐるのである。

大師は、高野山をもつて、入定留身の地とさだめた、素志の通り、承和二年三月二十一日に、金剛峯寺で、生身のまゝ、入定した。その時大師は心身になんの障りもなかつた。平素と、かはりない状態で入定したのである。三月十五日にいたり、高弟門葉一同をあつめて、かすくの遺告をなし、傳燈の候補者をさだめ、香水に身を清め、淨室に入り、それから一切の飲食を廢し、三月二十一日寅の刻に、豫言のごとく、金剛の大定に入つた。七七日の追福をいとなみ、葬送にのぞみ、衣裳をかへたのに、肌になほ濕ひあり、濫かにして、生身にかはらなかつた。第五十日目に、高弟にかつがれて、かねて定めおいたる奥の院の墓所に送られたのであつた。

その後、延喜二十一年に、觀賢僧正が、醍醐天皇勅賜の法衣をさゝげて、石梯をひら

き大師だいしの留身るしんに近づいたが、大師だいしは生身しゅうしんのごとく、少しも姿すがたはかはらなかつた。留身るしんによれた観賢くわんけん僧正そうじょうは、温みぬくをかんに、その掌てのひらがいつまでも、かんばしかつたとつたへられる。大師だいしはかやうに高野かうやの奥おくの院いんの奥城おくじょうにかくれて、彌勒みらく出世しゅつせを、まつてゐるのである。寛平くわんぺい法皇ほうわうの、叡慮えいりょにより、醍醐たいご天皇てんわうは、空海くうかい和尚わしやうに『弘法こうぼう大師だいし』の諡號しごうを勅賜ちやくみあそばされた。それから以來いらい、大師だいし號ごうの勅賜ちやくみをうけた大德だいたく智識ちしきは、すくなくないが、お大師だいしといへば、空海くうかい和尚わしやうにかぎるやうになつたのは、全くまった大師だいしの法力はふりきの、たかく、あまねく、ゆきわたつて、ゐることを、物語ものがたるのに、外ほかならぬのである。(おはり)



昭和九年三月二十五日印刷
昭和九年三月三十日發行

『弘法大師傳』 定價二十錢

不許複製

著者 永井榮藏

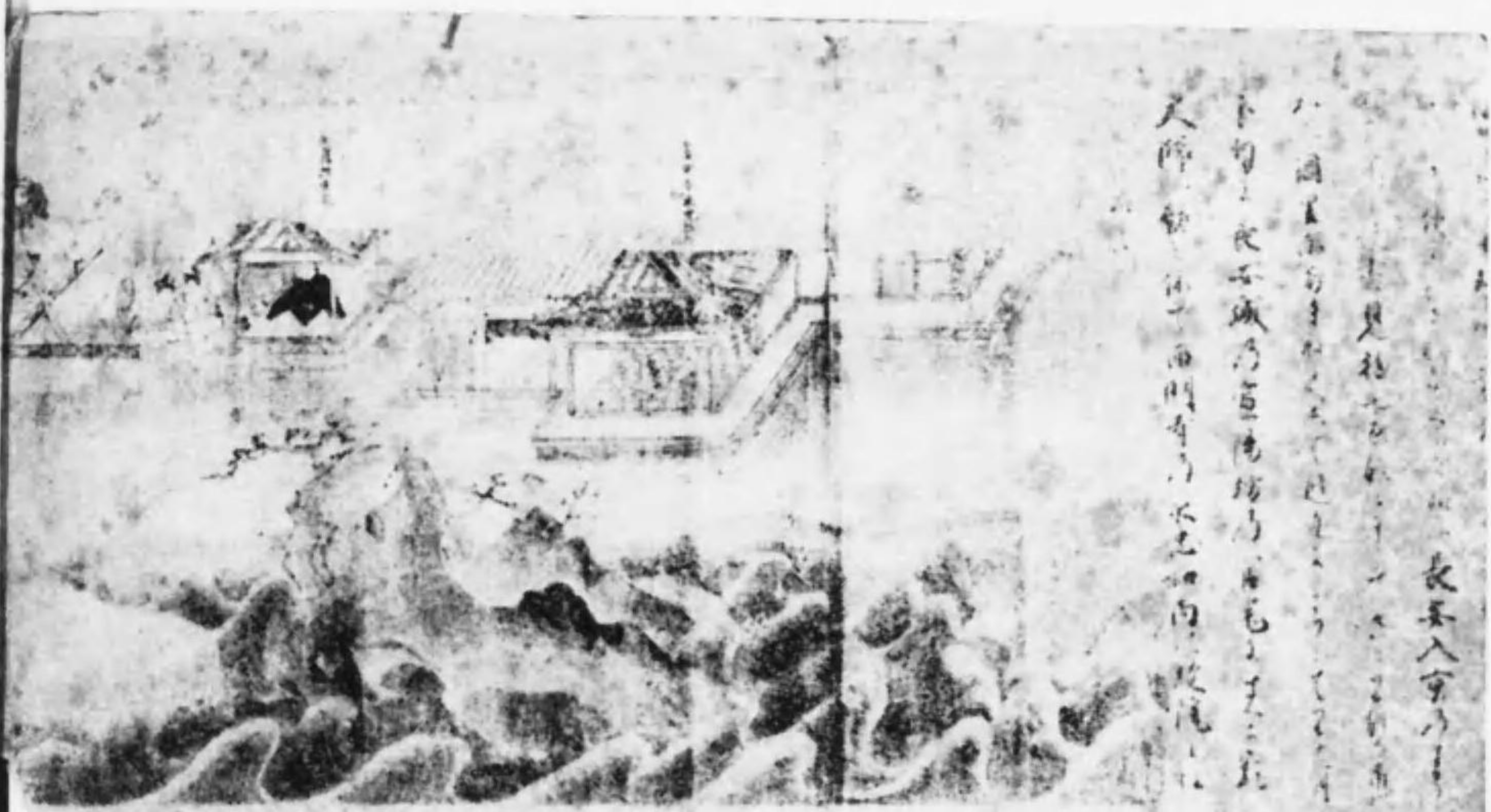
發行者 大田道弘 雄

印刷者 堀越 幸

發行所

大阪市北區中之島三丁目三番地
株式會社 朝日新聞社

55 50



長安入京の
見物
八國軍艦の
下切
天降



高麗海軍
孤仁
全朝
大師

朝日新聞社發行

海軍
人
す

終

